

言語生活についての一考察

著者	西尾 実
雑誌名	ことばの研究
巻	1
ページ	1-18
発行年	1959-02
シリーズ	国立国語研究所論集 ； [1]
URL	http://doi.org/10.15084/00001699

言語生活についての一考察

西 尾 実

1 言語生活

「言語生活」という語は、近年になって一般化してきた。いまから10年まえに公布された国立国語研究所設置法第1条にも、

国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い
というように、科学的調査研究の対象としてとりあげられている。なお、同設置法第2条には、事業項目のひとつとして、「現代の言語生活及び言語文化に関する調査研究」が数えられている。わたしたちにとっては、研究対象としての「国語」とともに、「言語生活」が何であるかということは、はっきり突きとめなくてはならない根本的な課題のひとつであった。わたしは、文学作品の分析を試み、また、国語教育の対象を明らかにしようとしてきた過程において、たえずこの問題ととりくんできている。したがって、わたしは、この問題の考察を、学説のなかでおこなうというよりも、生活そのもののなかでおこなってきた。

わたしは、最初、多分昭和初年のころからであるが、「国語」とか「言語」とかいわれている語は、学問の対象として規定された、ことばの本質的要素を抽象した概念であるから、われわれが日常経験している言語行為としてのことばをあるがままにとらえるには、この本質的要素を中軸として、それと切り離すことのできない関係で結びついている一回的個性的要素をも捨棄することなく、あるがままの実態を把握なくてはならないと考え、それをいい表わすのには昔から用い慣らされている「ことば」という語が、その意味内容にもっとも近い語であるということに気づかされた。昭和4年刊行の小著「国語国文の教育」は、その一端にふれている。やがて、同じ意味で、ソシュールの「言語学原論」（小林英夫博士訳）の中から、「ランゲージュ」の訳語としての「言語活動」

という語を借用することになった（昭和11年，岩波講座国語教育）。戦後になって，一般の用例にならい，ときに「言語生活」という語をつかい，ときに「ことば」という語を用いている。

そんなわけで，わたしはまず，言語の本質を問題にする前に，より具体的現実的なことばの実態を問題にしようとした。「言語生活の実態」とよんでもよかったはずであるが（昭和23年，「言葉とその文化」）。

そんな次第で，わたしは，「言語生活」という語を発見するまでに「ことば」「言語活動」などという語を用いて来た経過を辿っている。もちろんこの「ことば」と「言語活動」と「言語生活」とは，ぜんぜん同じ意味内容として用いてきたわけではなく，いわば，わたしの「言語生活」が見出される過程に他ならなかったというべきであろう。にもかかわらず，わたしが明らかにしようと求めてきた対象としては同じ意識に貫かれている。そういう関係から，現在でも，「言語生活」の意味内容を表わす語として，時に「ことば」を用いるばあいがある。が，この語は多義的で，小林英夫博士のいうところによると，17通りもの意味に使われているそうである。けれども，この語を「言語生活」の意味でとりあげてみると，最も広く，誰にもその意味が直観される語である。その意味で，ばあいによっては，「言語生活」の意味で，この「ことば」を用いなくてはならないばあいが少なくない。そのように，生活そのものとしてとりあげた「言語生活」が，その本質的要素としてとりあげられた「国語」とどういう関係をもった語であるかということを明らかにするためには，わたしとしてはわたしなりの論理を辿らなくてはならなかったのである。その経過した考察の概要を，あらためて辿ってみようと思う。

ことばは，すでにいわれているように，人間と人間との「通じ合い」の手段である。したがって，主体と主体との社会的な行為である。ある主体からある主体への伝達が主要な働きであるが，それは主要な働きだけを抽象した考え方であって，あるがままの働きの認識ではない。あるがままの働きは，主体と主体との「通じ合い」であって，そこに用いられることばは，人間と人間との相互規定として，その意味が決定される。

このことはサイバネティックスにおけるフィードバックの一事実として説明される。すなわち、話し手である主体が何らかのことはを取りあげるためには、聞き手である主体からの何らかのインフォメーションを受け取っていかなくてはならない。その意味で、主体との「通じ合い」としてのことは、話し手である主体と聞き手である主体との相互規定であるとしなくてはならない。わたしたちがコミュニケーションを「通じ合い」と解さなくてはならない理由である。

また、ことはの働きを表現と理解として考える考え方がおこなわれているが、そうしてそれは、ことはの働きの専門領域として発達している文学活動などにおいては明らかに認められる事実であるが、それも表現が単一な作用として成り立つのではない。そういう特殊領域をも成り立たせている基底でもある一般的なことはの働きは、この表現と理解をもふくんだ、コミュニケーションの訳語としての「通じ合い」という語によって一層その働きの真相が明らかにされる。表現という語は、理解という語と共に、ことはによる「通じ合い」における主体的な集中の度が強化せられているために、ことはの働きにおける個性的な面が強調されている。したがって、文学活動としてのことはの働きの特質を説明するには適当しているけれども、一般的なことはの働きを示すには適当していない。わたしがあらためて、一般的なことはの機能を「通じ合い」と呼ばなくてはならないとするゆえんである。

ことはの機能を「通じ合い」と呼ばれる社会的行為であるとする、その「通じ合い」を媒介することは、音声だけではない。音声を主軸として、目付き顔つきのような表情とともに、身振りや行動までそれと切り離すことのできない関連をもって結びついている、一種の有機的な構造である。わたしはこれを、ことはの実態と呼んでいる。つまり、ことはの本質的要素である音声を主軸とした実存としてのことはの現実態を、働きのままに捉えようとしたわけである。われわれが営んでいる社会生活において、もっとも単純な「通じ合い」である日常のあいさつにしても、音声に伴っている表情、身振り、行動などが、如何にそのあいさつによる「通じ合い」を根本的に規定しているか。また、それを豊かにしているか。そのなかから音声だけを抽象したのでは、その本質的

な要素を把握することはできるにしても、その全幅的な働きを把握することはできない。そういう意味で、人間と人間との「通じ合い」としてのことばは、一回的・個性的な要素をも含んだ行為であって、いつでも、どこでも、誰でも共通におこなわれている普遍的・客観的な要素だけを抽象した言語が、その本質的要素をなしていることは事実であるが、そういう「抽象的概念」からはみだす要素を含み、しかも、それを特質としている点で、「言語生活」としてのことばは、社会的行為であると同時に、一種の歴史的な行為であるとしなくてはならない。

2 言語生活体系

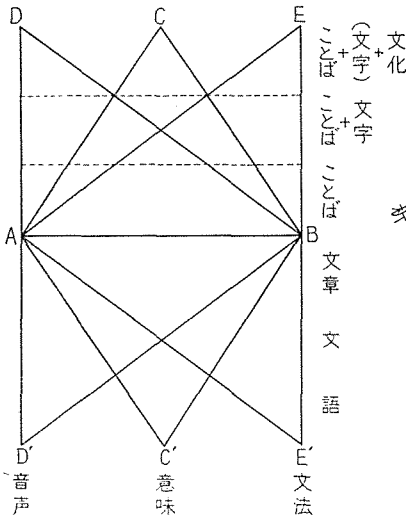
人類におけることばの発達を、その本質的要素によって、指示や身振りなどによった行動的言語時代と、音声の主軸とした音声的言語時代と、さらに、その音声を文字と符号で表記するにいたった文字的言語時代とに、大ざっぱにわけることができる。われわれの現在、文字的言語時代に達している。その文字的言語と呼ばれる言語も、それを書き読む「ことば」すなわち「言語生活」として反省し観察すると、そこに文字と符号で表記されるものは、音声そのものであるけれども、その音声には、それを書く人の個人的な呼吸や姿勢のような生理的な営みや、その時その場におけるその人の心理活動とが反映して、文体を形成する。その意味で、文字的言語としてのことばである文章は、音声的言語としてのことばである談話を基盤とし、その談話は、さらに、行動的言語としてのことばである表情や身振りや行動を背景とした、複雑微妙な構造を持っている。それが、ことばの実態である。

ことばは人間の社会的歴史的な行為として、このような機構をもって、その発展を示している。その機構発展の関連を比喩的な図式として示すと、およそ第1図のようになる。ABを共通底辺とし、CDEをそれぞれの頂点とした3つの三角形が、文学・哲学・科学などのことばの文化としての、独立した領域を成り立たせ、日常生活としての談話すなわちことばと、文章すなわち文字と符号によってそれを表記したことばとを、その共通的な前提条件としている。

これは、話し聞くことばの生活が、民族においても、個人においても、発生的にあって基本であり、生活的にあって日常性が最も大きい地盤であり、さら

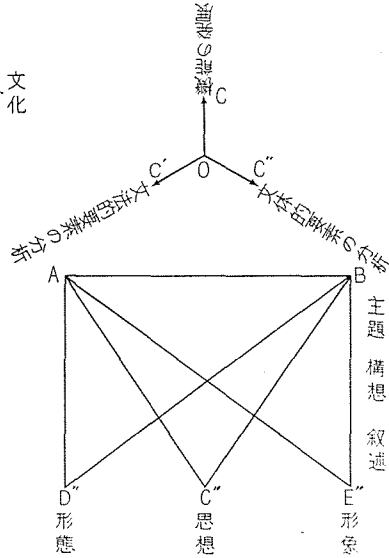
第1図

(第一図)



(第二図)

(第四図)



(第三図)

に、本質的にいって、ことばのことばたる条件を備えた最も基本的なものである談話生活を基盤領域とし、そのような話し聞く談話生活のことばを文字と符号で表記した文章生活をその発展領域とし、さらにまた、ことばの文化として専門的分野を形作っている文学・哲学・科学のような言語文化などのようなピークをその完成領域として成り立たせていることを示すつもりである。

ことばすなわち言語生活の機能は、このようにして、口ことばとよばれる談話生活と、書きことばとよばれる文章生活と、文学・哲学・科学などとよばれる言語文化との諸形態を成り立たせている。が、さらに、その完成段階である言語文化は、哲学・科学のような、抽象的概念的思考によって形成される文化と、文章のような、具体的形象的思考によって形成される文化とに大別される。

以上のような機能的発展を示している言語生活は、それが主体の社会的歴史的行為である関係からいって、その構造は、その相手の性質は数的に規定される。すなわち、談話生活における2人の間の話し合い、さらにいうと、話し手と聞き手とが1対1（1≧1）の関係で交替する対話・問答が、最も簡単な、

しかし密度の濃い、基本的な、通じ合いの単位である。また、3人もしくは3人以上多数とする1対多(1→多)の話し合いである会話・討議は、対話・問答を基本とした発展であって、その構造が複雑を加えるとともに、その機能も、第三者的存在を含むことによって、困難の度が加わってくる。が、これらは、対話・問答にしても、会話・討議にしても、すくなくとも立場のわかり合った者の間における話し合いであるが、これらとちがって、立場のわかっていない公衆を相手とした1対衆(1→衆)の演説・説教・講演などのような、公話や討論がある。放送・テレビもこれに属し、マス・コミュニケーションとよばれているところのものである。これも、その機能を精しく分析すると、対話・問答を基本とし、会話・討議をその発展とした、ことばによる通じ合いの完成的形態であって、決して一方的な伝達だけでもなければ、また、主体の真実の表現だけでもない。やはり、聴き手である公衆から発せられるさまざまなインフォメーションによって規定されることばである点において、あきらかに、説得とよばれる通じ合いの有力な機構である。

なお、問答・討議(discussion)は、対話・会話が生活的な話し合いで、話題がたえず流動するのとちがって、これは問題が一定し、その解決に協力的に集中する話し合いであるから、知的性格がいちじるしい。それぞれ対話・会話の特殊形態として、それに含まれるゆえんである。討論(debate)は、公話の特殊形態であって、話し手たちは立場を異にした対立の立場でも、聴き手の公衆を説得しようとしている点で、やはりマス・コミュニケーションである。討議は共同してひとつの結論に達しようとするのに、討論は対立して批判し合いながら、めいめいの結論に達しようとする。この両者は、一見、同じような過程をふくむけれども、その立場が構造的にも機能的にもちがっていることを認識しなくてはならない。

なお、文章生活の機構は、当然、談話生活のそれと対応した機構である。ただ、音声を主軸とした通じ合いが、その文字と符号による表記になった文章による通じ合いであるというところに、その特質が保たれているだけである。すなわち、「1対1」の通じ合いである通信・メモと、「1対多」の通じ合いである記録・報告と、「1対衆」の通じ合いである通達・「読みもの」が数えられ

る。新聞・雑誌のごとき、「読みもの」の代表的なものである。

談話にしても、文章にしても、マス・コミュニケーションとしての公話・討論なり、通達・読みものなりは、説得をめざす通じ合いであるが、ときに、単に「わからせる」ための報道もあれば、わからせて「のみこませる」ための宣伝もあり、わからせ、のみこませたうえに、「やらせる」説得もあるというように、およそ3類を立てることができる。

第1図において、ことばの文化とよんできた言語生活における専門領域ともいうべき言語文化のうち、ことばの芸術としての文学は、他の言語文化である哲学・科学などにくらべて、ことばの機能が全国的に発達している。哲学や科学などにおけることばの機能は、専門的に発達をとげてはいるけれども、高度の知的抽象的思考という一面性の発達であるが、文学においては、ことばの知的抽象的な面とともに、感性的な面も、情意的な面もふくんだ、具体的形象的な思考として発展をとげているから、ことばの機能としては、文学における機構を跡づけることが必要である。

文学は、民族においても、個人においても、さまざまな作品を成立させているが、これも、ことばの機能的構造を手がかりとして、基本的な形態を考えてみると、そこには、やはり、言語生活体系の2種3類、立場のわかり合った仲間とおしの通じ合いである1対1の対話的なものと、1対多の会話的なものと、立場のわかっていない1対衆の公話的なものとに大別することができる。

しかし、その文学作品の、ことばの芸術たるところは、いかなる機能としてあらわれるか。個人におけるばあいにおいても、子供の日常生活において現れる文学的才能は、母のような親しみの深い相手や、身の辺の物などに対する親愛や驚異の深さから発せられる独語の形をとって、その真実が表現され、しかもそれが、象想的な思考を成り立たせているばあいがすくなくない。民族におけるばあいにおいても、古代の歌謡として遺されているものには、このような対話的独語が、その大勢を占めていることは、記紀の歌謡や万葉集初期の歌にその例が多い。

それがやがて、歌人仲間とか後宮の女房社会とかいうような生活仲間の通じ合いとして、個性的な真実の深さを、象想的思考として表現するばあいの会話

的独語を成り立たせている。宮廷歌壇、大伴家歌壇だの、二条家、六条家、京極家、冷泉家などという歌壇はもとより、連歌会などの作品も考えられる。さらに、古代末期から中世にかけての説話や軍記のような語りものになると、そういう仲間の文学意識を脱した、いわば大衆に公開された、公話的独白の文学が誕生している。近世初期以来、人形劇・歌舞伎劇の発達、印刷術の発達による冊子類の普及とともに公話的独語の文学を興隆させた。しかし、近代における活字印刷の発達による新聞・雑誌など出版事業の躍進と、放送事業の発展にともなう、機械の媒介による公話的独語の文学は、いちじるしく商業的性格をおび、近代文学の特殊性をあらわにしている。

いずれにしても、ことばの芸術としての文学は、ことばの機構として、いずれかの談話形態をとりながら、作者その人の真実の形象的表現として独語の方向に集中し、沈潜するのが、その他の一般である。

言語生活は、その機能が一回的個性的であることによって、歴史的な行為である。しかし、その歴史的行為のすべてが、ただ断片的に孤立しているわけではない。無限に近い歴史的な行為であるにしても、基本的な形態とその構造とに着眼すると、談話文章はもとより、文学においても、ことばの機能を裏づけている社会意識を根底とした、共通な体系が成り立っている。言語生活には、あらゆる言語生活を成り立たせている言語生活体系ともいうべきものが、その根底に存在するとしなくてはならない。

3 言語体系

言語生活の機能的構造を分析し、その単位的な機構が何であるかをつきとめると、それは1対1の通じ合いである対話・問答になる。個人発生的にいうと片言や独り言があるかのように思われるが、これは通じ合いの手段になっていないから、じゅうぶんな意味でのことばでもなければ、言語生活でもない。独り言と形だけ似ているものに、独語（モノログ）がある。これは、すでにいつてきたように、文学的表現としての密度の高い通じ合いの手段で、あるいは対話的な、あるいは会話的な、あるいは公話的な立場に立っての独語である。しかも、それは、自覚の深さとして成り立つ自己と、もうひとつの深い自己と

の対話として展開する真実の通じ合いである点で、ことば以前の独り言とはその機能を異にしているものであることは、前にいってきたとおりである。

しかし、われわれの言語生活に対する分析は、このような言語生活体系を見いだすことのみにとどまるものではない。さらに、そういう機構を成り立たせている要素に着眼し、要素的分析をおこなうことが可能である。言語学とよばれ、国語学といわれている科学的な分析は、その最も有力な代表者である。が同じように、言語生活を対象としながら、その機能的な発展を体系的にとらえようとして言語生活体系を見いだしてきたわたしの立場からすると、その要素的分析である言語体系は、この言語生活体系とどのような関係をもった考察であるかを概観しなくてはならない。

すでにいってきたように、昭和初年に刊行した「国語国文の教育」以来、文学作品の分析をさまざまな角度から試みて、ことばの問題に当面してきたわたしは、当時の国文学に影響を与えたモウルトンの「文学の近代的研究」における文学形態成立論のなかで、詩と散文の発生的根拠を **Reflection** とよばれる南北軸と、これと交叉する東西軸 **Description** と **Presentation** に求めていることに教えられ、これは、けっきょく、人間の「思う」という主体的な思考作用と、「見る」という客体的な認識とが結合するところから、詩も散文も発生するものであると考えるようになった。つまり、「思う」という南北軸と、「見る」という東西軸との交点が、文学の生産点であるという考えに導かれていた。その後、ことばの問題を考え進むにつれて、この「思う」はたらきと、「見る」はたらきとの結合点は、文学の生産点であると同時に、もっと根本的には、ことばそのものの発生源であると考えなくてはならなくなっている

というのは、人間の思考のはたらきを、概念と判断と推理との3つとして考えることは、論理学の教えるところであるが、そうして、そのなかでも概念が基本で、概念と概念との結合が判断であり、判断と判断との結合が推理であると考えられていたが、近世になって、ブレンターノによって、この3つのなかで基本となるものは判断である、概念も判断の結果として成立する。たとえば、「これは雪である。」という判断の結果として、雪の概念は成立すると考えるようになったということは、われわれがことばの問題を考えるうえにも、重大な

影響を与えている。要素としては、概念をあらわす単語が最も単位的な存在であると考えられるが、ことばの機能としては判断をあらわす「文」、すなわちセンテンスが基本であるということになる。しかも、その判断は、客体的統一意識と主体的思考との統一であるから、「見る」（客体的認識）が、「思う」（主体的思考）と結合するその結合点であるとしなくてはならないと思う。したがって、第1図の底辺ABは、その「見る」と「思う」の結合点の延長でなくてはならない。

第1図は、言語生活の機能的な発展を比喩的な図形として示したものであるが、いまその言語生活を成り立たせている要素に着眼して、いわば要素的分析を試みると、これまでの言語研究の多くがとりあげてきたような、本質的要素としての意味と音声と文法との3要素が析出される。(第2図参照) しかも、それらは、あらゆる言語生活に共通した普遍的な要素として抽象される。

が、言語生活は、うえに考えてきたように、そういう共通の普遍的要素のほかに、一回的個性的な要素があらわれている。本質的要素とよばれるものは、この一回的個性的な要素を捨象することによって成り立つ抽象である。したがって、言語生活の分析は、当然、この本質的要素、すなわち共通の普遍的要素から捨象されていた一回的個性的な要素をも、共通の普遍的要素と区別される要素として抽象しなくてはならない。この共通の普遍的な要素の抽象的考察を、これまでの習慣にしたがって言語学(文法論)とよぶならば、一回的個性的な要素を抽象した考察は、言語美学(文体論)とよぶことが適当ではないかと考えられる。この一回的個性的な要素は、談話や文章の、あるいは形態的種類(genre)を決定し、あるいは様式(Stil)を成立させ、あるいはまた、思想(ism)を規定する。(第3図参照) したがって、この一回的個性的な要素がいちじるしく発達している文章である文学作品などになると、このような要素の分析をおこなわないと一回的個性的な面をとらえることができない。これまで、修辞学とか文体論とか言語美学とかよばれていた研究は、この一回的個性的な要素を主要対象とした考察であったとしなくてはならない。そこで、わたしは、言語生活の要素的分析は、言語学(文法論)と言語美学(文体論)の両面からおこなわなくてはならないと考え、この両面からの考察が言語体系をなり立たせるの

ではないかと考える。

(1) 言語学の問題点

言語生活体系が、言語生活の機能的発展の方向に成り立つ第1図のように、比喩的な図として示すことができるとすると、その要素的分析のひとつである言語学の体系は、ことばの発生点の延長であるABを、第1図のそれと共通な底辺として成り立つ倒三角形として示すことができる。すなわち、ABC'を意味要素とし、ABD'を音声（または文字と符号による表記）要素とし、ABE'を文法要素とした組み合わせとして、第2図が成り立つ。もちろん、この第2図も、第1図と同じような比喩的図形であることに変わりはない。まず、文法的要素のありかたを概観する。

文 章

言語生活の諸形態すなわち談話・文章・文化のすべてにわたって共通な要素は、まず「文章」として抽象される。したがって、その「文章」には、長いものもあれば短いものもあり、複雑なものもあれば単純なものもある。長いものは篇を分ち、章を立て、節を設けたうえに段落（パラグラフ）を切るというように組織されないと、その組み立てがはっきりしない。短いものといえば短歌や俳句のようなものもあり、「飛行機!」とか「花!」とかいうような1語にすぎないようにみえるものもあれば、「いる?」とか「落ちる!」とかいうような1語にすぎないようにみえるものもある。複雑なものといえば、組み立ての複雑なものもあるし、組み立ては短歌・俳句のように単純でも、意味内容が複雑なものもある。単純なものといえば、文章が長くても一段落にすぎないというような構成の単純なものもあれば、構成は複雑でも意味内容が知的で、感情的・感覚的な複雑さもなく、意志的な強調もないというようなものもある。しかし、わかりやすいか、わかりにくいかという難易になると、かならずしも長いもの複雑なものが難解で、短いもの単純なものが解しやすいとはかぎらない。俳句のような短いものに難解が多く、科学の論文のような知的抽象度の高い、その意味では単純なものでも、論理が高次に展開されているものなど難解である。

いずれにしても、そういう意味における文章は、意味においても、またそれ

の通じ合いとしての音声（文字・符号による表記）においても、さらに、それらの統一としての形すなわち文法においても、全体としての統一と完結がなくしてはならない。そういう点で、文章は言語生活の共通的普遍的要素として分析されるひとつの単位である。この点は、時枝博士が「日本文法口語編」で提言されている。

なお、文章は、話すばあいでも、書くばあいでも、段落を明確に立て、段落と段落との関係を論理的に展開させることが、われわれの現在の言語生活を改善し向上させる重要な問題点のひとつである。

文

文章における構成要素としての段落は、さらにいくつかの文（センテンス）として分析されるのが一般である。が、短歌・俳句のようなものになると、その構成要素は句として分析される。まえにあげた「花！」や「いる？」などのような単純なものになると、1語のようにみえるけれども、客体と主体との統一が成り立っているから、語ではなくて句であり、文であり、文章でさえある。上にあげた場合は句が一段落をなし、しかもそれが文章として成り立っているということになる。

文は、文章における意味を構成しているひとつひとつの判断が、音声（文字・符号）となり、完結した形をとったもので、これが文字と符号で表記されたばあいには、（○）がつくことは、橋本進吉博士が文の定義にいわれたとおりである。

文は、このようにして、文章構成の要素であるとともに、それ自身独立した単位である。それゆえ、文がそのまま文章におけるひとつの段落になることはもとより、文がひとつの文章としての複雑な通じ合いを成り立たせるばあいも少なくない。俳句のごときはその例である。ところが、文をさらにこまかに観察すると、その構造のうえでは文である条件を備えていないけれども、主体と客体とが統一されているものに「句」がある。

句は、「花が咲いた。」という文における、「花が」とか「咲いた」とかいうように、いずれも主体と客体との合一が成り立ってはいるが、したがって、判断の方向を決定してはいるが、判断そのものを完結してはいない。そういう意

味で、音声的には句で切るのが原則である。その表記は（、）によっておこなわれる。けれども、句は、ときに主体をあらわす語をともなわなばあいがある。「あす、出発する。」という文における「あす」は、「明日」のように一見単語にすぎないかのようにみえても、これは単語ではない、句である。何となれば、「あす」に何らかのイントネーションが伴い、主体的思考がはたらいている。したがって、文字表記においてはゼロ記号であっても、ことばとしては何らかの記号が伴っている。前掲引用してきた「いる？」や、「落ちる！」のようなもの、符号、(?)なり(!)なりをかならずつけなくては、その句の表記にはならない。この点において、わが国の表記法の現在は、文字による語表記だけが認められ、符号による句や文の表記がじゅうぶんには認められていないのではないと思われる。その意味で、符号を補助記号と考えるだけでは、書きことばの表記は完成しない。意味を決定している音声を表記する符号は、文表記としては、また、文章表記としては、文字とともに独立した、記号としなくてはならないと思われる。文や句の表記における句読その他の符号の重要性を再確認することは、われわれの現在の言語生活を改善し、向上させる、ひとつの重要な問題点である。

語

文を分析すると句が見いだされることは、うえに考えてきた。が、その句はさらに、語の結合によって成立していることも明らかである。何となれば、句は客体的認識と主体的思考との統一であるから。したがって、語には客体的な認識を表わすものと、主体的思考を表わすものとの2種が存在することになる。時枝博士によって、この客体的認識を表わす語が「詞」であり、主体的思考を表わす語が「辞」であると分類されているのは、きわめて適切な指摘であると考えられる。

が、このような「語」の認識は、言語生活における文章要素や文要素・句要素の認識にくらべて、すこし困難である。わたしが大正11年の4月、当時の高等小学卒業生を入学させた師範学校の1年生40人に試みた結果の記憶によると、「サルガカキノタネヲカニニヤリマシタ。」という文を板書し、ひとつひとつのコトバに分けて書くように要求したところ、37人は、「サルガ」「カキノ」「タ

ネヲ」「カニニ」「ヤリマシタ」のように、句に分解した。3人だけ語に分解したが、「ヤリ」と「マシタ」の分解ができたものはひとりもなかった。3人のなかのひとりには、「カキ」「ノ」「タネ」の3つの語に分けたうえに、傍線を引きひとつのことばとも考えられるという意味のことを書いてあった。当時、文法学習を全然おこなっていなかった小学校8か年の教育を受けた生徒に、はじめて文法を学ばせようとした第1時間目の作業で、品詞論に入る準備として語意識を得させようと試みた経験であった。

語は、句の分析によって得られる言語の究極的な1単位であるが、そうして、それは、言語生活としての文章や文や句を成り立たせる可能要素として、主体的に意識されうる単位である。しかし、この語意識は、論理における「概念」が、「判断」の成果として成り立つと考えられるように、また、それは、詞はもとより辞も、ひとつの作用概念であるかぎり意識の次元が高く、認識に多少の困難がともなうものであることは、わたしのささやかな経験によってさえ明らかな事実であると思われる。

このようにして、語はわれわれの言語生活としての文章や文や句を成り立たせる要素であるだけに、生活としては、かならず、詞は辞を求め、辞は詞に付くというような結合を得て存在しているから、一見、詞があって辞が存在しないようにみえるばあいでも、話すばあいにはかならず、語尾をあげたり抑えたり、たいらにして切ったりすることによって、意味を限定し、句としての機能を果たしている。したがって、これが表記に当っては、その音声的記号を、かならず(?)(!)(,)その他の符号によって示さなくてはならないであろう。

われわれの言語生活は、その本質的な要素を形のうえから分類すると、以上のように、文章論・文論・語論を成り立たせ、文法学の領域を形成している。

なお、こういう言語生活のさまざまな形は、もともと意味と、その通じ合いの方法としての音声を本質的な要素としているから、言語学の領域は、さらに意味学と音声学(表記法をふくむ)とを成り立たせ、さらに言語心理学、言語社会学等々のような科学的研究をも成立させている。が、それはますます抽象的専門的な研究領域に属する。

(2) 言語美学の問題点

言語生活を生活としての体系としてとりあげることに出発したわたしは、さらに進んで、その言語生活を本質的な要素の面から考察する言語学（国語学）に学んで、要素的に抽象し、共通の普遍的な要素を分析的方向にそって体系的に跡づけてきた。が、このような分析と総合は、当然、そのさい捨象してきた一回的個性的な要素を抽象し、言語生活そのものが社会的行為であると同時に歴史的な行為であるという特質をも体系化することができるかどうか、それを考えてみなくてはならない。わたしは、それが言語美学であり、文体論でなくてはならないと考え、その問題点を考察することによって、この試論を結ぼうと思う。

ことばによる形象的思考としての文学の生産点であると同時にことばそのものの発生点である、「見る」東西軸と「思う」南北軸との交点をつらぬく延長線ABを、第1図第2図と共通な底辺とした倒三角形ABC'', $\triangle ABD''$, $\triangle ABE''$ の組み合わせによる第3図は、言語生活の一回的個性的な要素の抽象として、共通の普遍的要素と結合し、重なり合っている体系であるから、第2図と表裏した図形を形づくるべきであるが、それは見にくいから、わざと第2図と横にならべた同じ倒三角形の組み合わせとし、これによって、比喩的にその問題点の所在と関係を明らかにしようとする。

この言語美学（文体論）の適用は、言語生活における機能的な発達のうち、文学において特に著しい展開を示しているのが、その一般であるから、ここには文学作品における一回的個性的な要素を抽象し、分析するための要素とその体系をとりあげて、問題点の概観とする。

文学作品の一回的個性的要素は、一般に文体とよんでとりあげられるのが、その常である。この「形象」を、 $\triangle ABE''$ とする。が、文学作品の一回的個性的要素は、このような形象、さらに「思想」「形態」に分析される。この「表現」要素を ABD'' とする。さらに、この「思想」要素を ABC'' とする。文学作品における一回的個性的要素は、この3要素の組み合わせとして抽象することができる。

文学作品には、時代により作家によって、そのいずれが強調され、いずれがその背後に退いているかというような関係はあるけれども、この「思想」・「形

態」・「形象」の3要素が統一されていることには変わりがない。したがって、一作品についてみると、第3図のように、この3要素が未分化的に融合している「主題」が種子となって、適当な土壌と湿度と温度を得て発芽し、茎幹を伸ばし、枝を広げたものが「構想」である。が、この枝は、その先端に葉をつけ、花を開き、実を結ぶ。それが「叙述」である。この比喻において、種子である主題はもとより、茎・幹・枝である構想も、花・葉・実である叙述におおわれている。したがって、叙述をとおして構想が見いだされ、さらに主題が探りあてられる、というような有機的関係をもっている。

文学作品の一回的個性的な要素である「思想」は「主題」を、「形象」は「構想」を、「形態」は「叙述」を中心として、作品のうえにあらわれる。

このようにして、言語生活の主要なひとつである文学作品の要素的分析は、共通の普遍的要素の分析である言語学的（文法論的）分析と、一回的個性的要素の分析である言語美学的（文体論的）分析とを両面から考察しなくてはならない。わけても、この文体論的要素は、常に文法論的要素と相まつことによって、作品の叙述を形成し、主題・構想を成り立たせている要素であることを見のがしてはならない。

作品研究によって作者が見いだされ、さらに文学の歴史が跡づけられるのも、この一回的個性的な要素である思想と形態と形象が、文体論的に分析されるからである。なお、ジャンルと呼ばれている「文学形態」は、この「形態」要素の類型としてなり立ち、スタイルと呼ばれている「様式」は、形象の類型としてなり立っている。近代文学において、イズムと呼ばれている「思潮」も、同じようにこの「思想」の類型としてなり立っている。このような文体的要素が著しくあらわれるのは文学作品であるが、われわれの日常の談話や文章にも、また、言語文化としての哲学や科学等にも、この意味におけるなんらかの文体的要素があらわれているが、それはきわめて微弱でありかつ本質的要素である共通の普遍的要素の中に、解消している場合が多い。

われわれの言語生活体系と、その要素的分析である言語体系すなわち文法的分析と文体的分析との関係は、第1図をOC、第2図をOC'、第3図をOC'、とすると、第4図のような関係として考えることができるであろう。これらは

言語生活をその基本形態において体系的にとらえ、それを要素的に分析すれば文法的体系と文体的体系との両面に分析され、この二つの面によって、言語そのものの体系がたどられることを比喩的に図示したものである。

もちろん、この二つの要素的分析は、抽象的に共通の普遍的な要素と一回的個性的な要素にわけて考察した体系であるから、生活的にはつねにこの両要素は一体となってはたらいっている。それを部分的にとらえると、ある場合には共通の普遍的要素が主となり、ある場合には一回的個性的な要素が主となるというような違いはあるにしても、この二つの体系は、あくまで要素的抽象において成立する体系である。したがって、それを生活的に捉えようとすれば言語生活体系のような機能的体系を認めることが必要であると考えられる。認めた上での要素的分析でなくてはならないと思う。

それにしても、わたしのように言語生活におけるひとつの文化形態としての文学作品の機能的分析からことばの問題に当面したものからすると、作品の解釈学的分析である主題・構想・叙述のような、一回的個性的な面が主となって分析され、その叙述面が文章と文と語として抽象されるというような過程に陥りやすい。

しかし、それは文学作品という専門的な言語文化に関する領域の分析であって、哲学・科学などによって代表される文学以外の一般的文章は、必ずしも文学作品におけるような次元の主題・構想・叙述のような一回的個性的要素を含まない。もし含むとしてもきわめて稀薄である。いいかえると共通の普遍的な要素を主とした文章が成立し、したがって文が分析され、更に語が分析される。したがって、この文章・文・語の体系を文芸作品における「叙述」の分析としないで、やはり言語の発生点から直接展開される別な体系として考えるのが妥当であると考えようになった。これが AB を共通底辺として、言語生活体系を成立させると同時に、同じ AB を共通底辺とした三角形の総合として言語学的体系が成立し、更に同じ AB を共通底辺として言語美学体系が成立するという考察に達し、比喩的図形を用いてこの両体系と言語生活体系との関係を明らかにしようとした次第である。

この考察は、わたしが文学作品の解釈学的分析を進めて「ことば」の問題に

当面したとき、われわれの主体的行為としてのことばの実態は、その本質的要素である「意味」と「音声」との関係だけでとらえうるかという問題に出発している。してみると、ことばの機能も単なる伝達だけではなく、 **communication** と呼ばれる通じ合いであるということが確認され、ことばは主体の言語行為であるには違いないが、それは主体と主体との相互規定によって生れる点で一種の社会的行為であるということがわかり、したがって、それは一種の共同体系構造をもつものであるという立場から、その基本形態をとらえ、その機能体系を樹てることができた。更にそれと要素的分析としての二つの言語体系との関係を考え、あらたに前進しつつある言語の科学的研究との関係をも明らかにしようとしたものである。なお、言語生活に関する部分的問題についてはすでに二、三の考察を公けにしているのでここには再論をさけた。